

34. Udink ten Cate FE, Breur JM, Cohen MI, Boramanand N, Kapusta L, Crosson JE, Brenner JJ, Lubbers LJ, Friedman AH, Vetter VL, Meijboom EJ. Dilated cardiomyopathy in isolated congenital complete atrioventricular block: early and long-term risk in children. *J Am Coll Cardiol*. 2001;37:1129–1134.
35. Qu Y, Baroudi G, Yuc Y, Boujdir M. Novel molecular mechanism involving alpha1D (Cav1.3) L-type calcium channel in autoimmune-associated sinus bradycardia. *Circulation*. 2005;111:3034–3041.
36. Vettrano IM, Hoprasart NJ, Bronsteen RA, Comstock CH. Clinical implications of the prenatal sonographic finding of fetal myocardial echogenic foci. *J Ultrasound Med*. 2005;24:195–199.
37. Icardo JM, Colvee E, Revuelta JM. Structural analysis of chordae tendineae in degenerative disease of the mitral valve. *Int J Cardiol*. 2013;167:1603–1609.
38. Myers PO, del Nido PJ, McElhinney DB, Khalpey Z, Lock JE, Baird CW. Annulus upsizing for mitral valve re-replacement in children. *J Thorac Cardiovasc Surg*. 2013;146:347–351.

#### CLINICAL PERSPECTIVE

Acute massive mitral regurgitation attributable to rupture of the chordae tendineae is a serious condition in which patients experience the sudden onset of circulatory and respiratory failure. This condition was thought to be rare in young children. However, several child cases have been reported in Japan, and most cases are infants aged between 4 and 6 months. We conducted a nationwide survey of the disease and analyzed 95 cases. The disease has a seasonal epidemic that peaked in the spring and summer. Eight patients died of acute heart failure and 26 patients underwent mechanical valve replacement. The direct cause of rupture remains unknown, and the patients are diagnosed as idiopathic. However, Kawasaki disease, maternal anti-SSA antibody, infectious cause, and myxoid change of the mitral valve appear to be underlying conditions. As the clinical entities and criteria of the disease have not been established yet, some patients may have gone unnoticed after dying or being misdiagnosed with other conditions such as sudden infant death syndrome. Acute rupture of the mitral chordae tendineae in infants is a new syndrome. This disease does occur in countries other than Japan and should be recognized as a significant cardiovascular disorder in infants.

乳児特発性僧帽弁腱索断裂  
Acute Rupture of Chordae Tendineae of the Mitral Valve in Infants

国立循環器病研究センター 小児循環器部  
白石 公  
565-8565 大阪府吹田市藤白台 5-7-1

Acute Rupture of Chordae Tendineae of the Mitral Valve in Infants  
Isao Shiraishi, MD, PhD.  
Department of Pediatric Cardiology  
National Cerebral and Cardiovascular Center

Key words: 乳児特発性僧帽弁腱索断裂,  
急性心不全, 僧帽弁閉鎖不全, 川崎病, 抗 SSA 抗体, 僧帽弁形成術,  
僧帽弁置換術, Acute Rupture, Chordae Tendineae, Mitral Valve

### 1. 基本病因、発生機序

乳幼児特発性僧帽弁腱索断裂とは、生来健康である乳児が数日の感冒様症状に引き続きいて突然の僧帽弁閉鎖不全により急速に呼吸循環不全に陥る疾患である 1)-6)。本疾患は原因が不明で、過去の報告例のほとんどが日本人乳児であるという特徴をもつ 5)6)。発症早期に的確に診断されて専門施設で適切な外科治療がなされないと、急性左心不全により短期間に死亡することがある。また緊急外科手術により救命し得た場合も機械弁置換術を余儀なくされたり、また急性循環不全により血圧低下から神経学的後遺症を残したりなど、子どもたちの生涯にわたる重篤な続発症をきたすことが多い。しかしながら本疾患は国内外の小児科の教科書に独立した疾患として記載されておらず、患者家族のみならず多くの一般小児科医も本疾患の存在を認識していないのが現状である。また本疾患は急激に発症するため、一般に胸部 X 線写真で心拡大が明らかでないことが多く、急性左心不全による肺うっ血を肺炎像と見間違ふことも希ではない。本疾患には数多くの臨床的特徴がみられるので、その情報を広く全国の小児科医が認識することで、早期診断と早期治療が可能となり、死亡例や重篤な合併症を減らすことができると考えられる 5)6)。

突然に僧帽弁腱索が断裂する原因として、僧帽弁および腱索組織の非細菌性心内膜炎 5)、母体から移行した自己抗体(抗 SSA 抗体)による胎児期からの腱索および乳頭筋の傷害 3)4)、川崎病による腱索の炎症 5)6)、弁および腱索組織の粘液変成 5)6)、など何らかの感染症や免疫異常が引き金となる可能性が示唆されるが、病因の詳細は不明である。

### 2. 基本病態：

突然の僧帽弁腱索断裂により急激に大量の僧帽弁閉鎖不全が発症する (図 1)。急性心不全のために代償機転が働かず、低心拍出による抹消循環不全およびショック症状、急性肺うっ血による呼吸困難などが主要症状となる。

### 3. 病態生理からみた臨床症状 (表 1)

本疾患は生後 4~6 ヶ月の乳児に好発する 1)2)5)。ただし母親由来の SSA 抗体陽性患者では生後 1~2 ヶ月以内に発症することがある 3)4)。数日の発熱、咳嗽、嘔吐などの感冒様の前駆症状に続き、突然に僧帽弁腱索が断裂する。重度の僧帽弁閉鎖不全により心拍出量の低下および著しい肺うっ血をきたし、短時間に多呼吸、陥没呼吸、呼吸困難、顔面蒼白、頻脈、ショック状態に陥る。少数で三尖弁の腱索断裂を合併することがある。複数の腱索が断裂すると、人工弁置換術を余儀なくされることがある。術後に別の腱索次々と断裂し、数日後に人工弁置換が必要となる症例も散見される 1)5)。乳児時期に人工弁置換を行った場合は、生涯にわたる抗凝固剤の内服が必要であるとともに、再弁置換もしくは再々弁置換術が必要となる。また女兒では成人期に達した際、抗凝固薬の内服は妊娠や出産において大きな障害となる。

通常、胸骨左縁第 III 肋間から心尖部にかけて収縮期逆流性心雑音が聴取される。心雑音

の指摘のない乳児が急速に呼吸循環不全に陥り、新たな心雑音が聴取された場合には、本疾患を疑う。ただし急性左心不全による肺水腫のため、肺野に全体に湿性ラ音が聴取されて心雑音が聴き取りにくい場合があるので注意が必要である。また急速な経過のために心拡大が顕著でないことが多く、心疾患として認識されず、肺炎と初期診断する可能性があるので注意を要する。

#### 4. 病態生理からみた診断のための臨床検査

急性循環不全によるショックから白血球数は中等度の増加がみられるが、一般に CRP は軽度の上昇に留まる。心不全の強い症例ではトランスアミナーゼ値が上昇するが、心筋逸脱酵素、とくに CPK-MB や心筋トロポニン T の上昇は見られない<sup>1)2)5)</sup>。急速に症状が進行する多くの症例では、胸部 X 線における心拡大は軽度（心胸郭比として 55%程度）であり、両肺野にうっ血像が認められる（図 2）。一部の僧帽弁閉鎖不全の経過の長い症例では心拡大が明らかとなる。心電図では特徴的な所見は少なく、左胸部誘導で T 波の平定化や陰転が見られる。確定診断は断層心エコーで行う。左室長軸断面において、僧帽弁尖の高度な逸脱および翻転、腱索の断裂、ドプラー断層で大量の僧帽弁逆流シグナルを確認する（図 2）。病理組織所見では、マクロファージやリンパ球を主体とした単核球の浸潤が認められるがその程度は軽度で、細菌性心内膜炎を疑わせるような多核白血球を主体とした高度な炎症性細胞浸潤は認められない。

#### 5. 治療目標とその手順、および症状・検査所見からみた効果判定指標

基礎疾患のない 4～6 ヶ月の乳児に、数日の感冒要症状に引き続き、突然の多呼吸、陥没呼吸、顔面蒼白、ショック症状がみられ、聴診で収縮期の逆流性心雑音が聴取された場合、本疾患を疑う。断層心エコーにより診断がつき次第、可及的に乳児の僧帽弁形成または僧帽弁置換術が行える小児病院もしくは専門施設に紹介する。治療として、まず呼吸循環動態の改善に努める。全身蒼白のショック状態で呼吸困難が強い場合には、鎮静下に気管内挿管による人工呼吸管理を行い、動脈ラインおよび中心静脈ラインの確保による集中治療管理を開始し、アシドーシスの補正、強心薬の持続静脈投与、利尿薬の静脈内投与による肺うっ血の改善を実施する。これらの集中治療によっても呼吸管理および循環動態が維持できない症例では、時期を逃さず外科手術に踏み切る。

手術は一般に人工腱索を用いた僧帽弁腱索形成術を行う。僧帽弁輪が拡大した症例では弁輪縫縮術も併用する。ただし複数の腱索が断裂した症例や、断裂が前尖と後尖の広範囲にわたり人工腱索では修復不可能と判断される場合は、機械弁置換術を行う。好発年齢である生後 4～6 ヶ月の乳児では、通常 16mm の機械弁を挿入する<sup>11)</sup>。

#### 6. よくある合併症の病態生理とその診断・治療・予防

弁形成もしくは弁置換により外科手術が成功すれば、左室の収縮機能は比較的短期間に改善する。また症例によっては、腱索形成術後に別の腱索が新たに断裂することがあり、術後も断層心エコーおよびドプラー断層により僧帽弁閉鎖不全の増悪に十分留意する必要がある。ショック状態で搬送された症例では、低血圧もしくは低酸素による中枢神経系障害を合併することがあるので、術直後より頭部エコー検査や頭部 CT 検査を実施して、脳浮腫や頭蓋内出血などの中枢神経系障害の出現に留意する。また過換気による低炭酸ガス血症は脳血流を低下させる可能性があるため注意が必要である。

#### 7. 症状経過、検査所見からみた予後判定

平成 22 年度に行われた全国調査では、過去 16 年間に発症した 88 例の臨床データが集計され、死亡例が 6 名 (6.8%)、人工弁置換症例が 25 例 (28%) 報告されており<sup>6)</sup>、生来健康な乳児に発症する急性疾患として見逃すことのできない疾患である。病因を明らかにし適切な治療法を確立することが急務である。

文献

- 1) Torigoe T, Sakaguchi H, Kitano M, et al.. Clinical characteristics of acute mitral regurgitation due to ruptured chordae tendineae in infancy. *Eur J Pediatr.* 2012;171:259-65.
- 2) Asakai H, Kaneko Y, Kaneko M, et al. Acute progressive mitral regurgitation resulting from chordal rupture in infants. Complete atrioventricular block as a complication of varicella in children. *Pediatr Cardiol.* 2011;32:634-8.
- 3) Hamaoka A, Shiraishi I, Yamagishi M, et al. A neonate with the rupture of mitral chordae tendinae associated with maternal-derived anti-SSA antibody. *Eur J Pediatr.* 2009;168:741-3.
- 4) Cuneo BF, Fruitman D, Benson DW, et al. Spontaneous rupture of atrioventricular valve tensor apparatus as late manifestation of anti-Ro/SSA antibody-mediated cardiac disease. *Am J Cardiol.* 2011;107:761-6.
- 5) 白石 公ほか. 乳児特発性僧帽弁腱索断裂の病因解明と診断治療法の確立に向けた総合的研究. 平成 22 年度厚生労働科学研究費補助金 (難治性疾患克服研究事業) 分担研究報告書.
- 6) 白石 公. 最近注目されるようになった疾患-乳児特発性僧帽弁腱索断裂. *小児内科.* 2013;45:1117-1119.

表 1：乳児特発性僧帽弁腱索断裂の臨床的特徴

1. 生来健康な生後 4～6 ヶ月の乳児に、数日の熱、咳、嘔吐などの感冒様症状に引き続いて、突然の重篤な呼吸循環不全で発症する。
2. 本疾患は日本人乳児に好発するが、これまで国内外の成書に独立した疾患として記載されておらず、患者家族のみならず一般小児科医もこの疾患の存在を認識していない。
3. 原因として、ウイルス感染、川崎病後、母親由来の抗 SSA/SSB 抗体、僧帽弁の粘液様変性などが示唆されるが、現在のところ詳細は不明である。
4. 胸部 X 線像では心拡大は目立たず、急性左心不全による肺うっ血を肺炎像と見間違えることがある。断層心エコーで診断が可能であり、診断がつきしだい、新生児乳児の心臓外科手術が可能で小児循環器専門施設へ紹介する。
5. 適切な診断と外科治療が実施されると救命可能であるが、死亡例や人工弁置換例も多数存在し、生来健康な乳児に発症する急性心不全として看過できない疾患である。

文献 6)より改変引用

図 1：僧帽弁腱索断裂にみられる血行動態

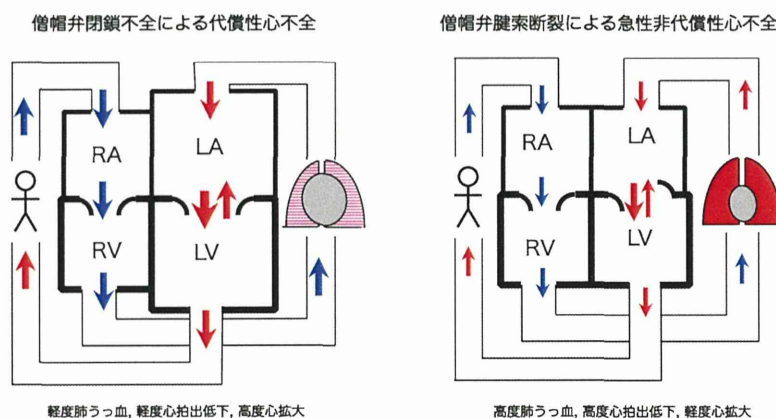
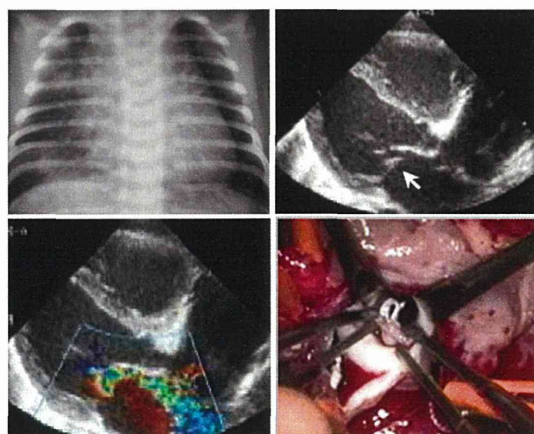


図 2：乳児特発性僧帽弁腱索断裂（生後 1 ヶ月）の胸部 X 線像、断層心エコー所見ならびに手術所見（文献 3) 6) より引用）



4. 気づかないと致死的な乳児特発性僧帽弁腱索断裂

国立循環器病研究センター 小児循環器部  
白石 公  
(シライシ イサオ)  
565-8565 大阪府吹田市藤白台 5-7-1

はじめに

詳細な病態が知られていない乳児の急性疾患の1つに、乳幼児特発性僧帽弁腱索断裂がある。生来健康な乳児に数日の感冒様症状に引き続いて僧帽弁の腱索が断裂し、急速に呼吸循環不全に陥る疾患である。現時点では詳細な原因は不明で、過去の報告例のほとんどが日本人乳児であるという特徴を持つ<sup>1)2)5)6)</sup>。本疾患には数多くの臨床的特徴がみられるので、その情報を広く全国の小児科医が認識することで、早期診断と早期治療が可能となり、死亡例や重篤な合併症を減らすことができると考えられる。

I. 病態と病因

1. 基本病態：

多くの症例で数日の感冒様前駆症状に引き続いて突然に僧帽弁の腱索が断裂し、大量の僧帽弁閉鎖不全による急性左心不全が発症する<sup>1)2)5)</sup>。発症早期に的確に診断され、専門施設で適切な外科治療がなされないと、急性左心不全および肺うっ血により短期間に死亡することがある。また緊急外科手術により救命し得た場合も、機械弁置換術を余儀なくされたり、神経学的後遺症を残したりすることがあり、子どもたちの生涯にわたる重篤な続発症をきたすことが多い<sup>1)2)5)6)</sup>。

2. 考えられる病因：

突然に僧帽弁腱索が断裂する原因として、僧帽弁および腱索組織の非細菌性炎症<sup>1)2)6)</sup>、母体から移行した自己抗体(抗SSA抗体)による腱索および乳頭筋の心内膜組織の傷害<sup>3)4)6)</sup>、川崎病回復期<sup>6)</sup>、僧帽弁の粘液変成<sup>6)</sup>、など何らかの感染症や免疫異常が引き金となる可能性が示唆されている。しかしながら腱索断裂のメカニズムの詳細は不明である。

II. 臨床症状と検査所見

1. 臨床症状の特徴

本疾患は生後4～6ヶ月の乳児に好発する。ただし母親由来のSSA抗体陽性患者では生後1～2ヶ月以内に発症することがある。数日の発熱、咳嗽、嘔吐などの感冒様の前駆症状に続き、突然に僧帽弁腱索が断裂する。重度の僧帽弁閉鎖不全により心拍出量の低下および著しい肺うっ血をきたし、短時間に多呼吸、陥没呼吸、呼吸困難、顔面蒼白、頻脈、ショック状態に陥る。通常、胸骨左縁第III肋間から心尖部にかけて収縮期逆流性心雑音が聴取される。

2. 検査所見の特徴<sup>6)</sup>

ショックにより白血球数は中等度の増加がみられるが、一般にCRPは軽度の上昇に留まる(全国調査の中央値1.60mg/dL)。トランスアミナーゼ値は多くは正常範囲で、心筋逸脱酵素の上昇は見られない。BNP値は高度に上昇する(中央値1,450pg/mL)。胸部X線所見では、急性心不全のため代償機転が働かず心拡大は軽度(CTR中央値56%)にとどまるが、多くの症例(75%)で肺うっ血像が認められる。心拡大が目立たないため、本疾患の肺うっ血像を肺炎と初期診断してしまう可能性があるため注意を要する。心電図では、急性心不全による左胸部誘導でT波の平定化や陰転が見られる。断層心エコー検査で診断可能で、

左室長軸断面および心尖部四腔断面像において、僧帽弁尖の逸脱、腱索の断裂、ドプラー断層で大量の僧帽弁逆流シグナルを確認する。その他の特徴的な所見として、乳頭筋頂部にエコー輝度の亢進が認められることがある。

病理組織所見では、僧帽弁尖および腱索の心内膜組織にマクロファージや T リンパ球なその単核球の浸潤が認められる。その程度は軽度で、細菌性心内膜炎を疑わせる多核白血球を主体とした高度な炎症性細胞は認められない。

### III. 診断と治療、予後

#### 1. 診断

生来健康で心雑音の指摘がない生後 4～6 ヶ月の乳児に、数日の感冒要症状に引き続き、突然の多呼吸、陥没呼吸、顔面蒼白、四肢冷感、乏尿、ショック症状がみられ、聴診で収縮期の逆流性心雑音が聴取された場合、本疾患を疑う。断層心エコーにより診断がつき次第、可及的に新生児乳児の開心術が行える小児循環器専門施設に紹介する。

#### 2. 必要な治療

入院後、まず呼吸循環動態の改善に努める。ショック状態で呼吸困難が強い場合、鎮静下に気管内挿管による人工呼吸管理を行い、動脈および中心静脈ラインの確保による集中治療管理を開始し、アシドーシスの補正、強心薬の持続静脈投与、利尿薬の静脈内投与により、左心不全および肺うっ血の改善を試みる。これらの集中治療によっても呼吸管理および循環動態が維持できない場合は、時期を逃さず外科手術に踏み切ることが重要である(1)(2)(6)。

手術は一般に人工腱索を用いた僧帽弁腱索形成術を行う。僧帽弁輪が拡大した症例では弁輪縫縮術を併用する。ただし複数の腱索が断裂し広範囲にわたる症例で、人工腱索だけでは修復不可能と判断される場合は、機械弁置換術を行う。好発年齢である乳児では、通常 16mm の機械弁を挿入する。

#### 3. 術後の注意点

外科手術が成功すれば、左心機能は比較的短期間に改善する。また症例によっては、術後に新たな断裂が発症することがあり、術後も断層心エコーおよびドプラー断層により僧帽弁閉鎖不全の増悪に十分留意する必要がある。ショック状態で搬送された症例では、低血圧や低酸素による中枢神経系障害を合併することがあるので、術直後より頭部エコー検査や頭部 CT 検査を実施して、脳浮腫や頭蓋内出血などの中枢神経系障害の出現に留意する。

### IV. 予後

全国調査では 95 例の臨床データが集計され、死亡例が 8 名 (8.4%)、人工弁置換症例が 26 例 (27.3%)、呼吸循環不全に伴い発症した中枢神経系後遺症が 10 例 (10.5%) に認められた (6)。生来健康な乳児に発症する急性循環器疾患として見逃すことのできない疾患である。病因を明らかにし適切な治療法を確立することが急務である。

文献

- 1) Torigoe T, Sakaguchi H, Kitano M, et al. Clinical characteristics of acute mitral regurgitation due to ruptured chordae tendineae in infancy. *Eur J Pediatr*. 2012;171:259-65.
- 2) Asakai H, Kaneko Y, Kaneko M, et al. Acute progressive mitral regurgitation resulting from chordal rupture in infants. Complete atrioventricular block as a complication of varicella in children. *Pediatr Cardiol*. 2011;32:634-8.
- 3) Hamaoka A, Shiraishi I, Yamagishi M, et al. A neonate with the rupture of mitral chordae tendinae associated with maternal-derived anti-SSA antibody. *Eur J Pediatr*. 2009;168:741-3.
- 4) Cuneo BF, Fruitman D, Benson DW, et al. Spontaneous rupture of atrioventricular valve tensor apparatus as late manifestation of anti-Ro/SSA antibody-mediated cardiac disease. *Am J Cardiol*. 2011;107:761-6.
- 5) 白石 公. 最近注目されるようになった疾患-乳児特発性僧帽弁腱索断裂. *小児内科*. 2013;45:1117-1119.
- 6) Shiraishi I, Nishimura K, Sakaguchi H, et al. Acute rupture of chordae tendineae of the mitral valve in infants: A nationwide survey in Japan exploring a new syndrome. *Circulation* 2014;130:1053-61.

表 1

Key Points : 乳児特発性僧帽弁腱索断裂の特徴

- 
6. 生来健康な生後 4～6 ヶ月の乳児に、数日の熱、咳、嘔吐などの感冒様症状に引き続いて、突然の重篤な呼吸循環不全で発症する。
  7. 急性心不全のために胸部 X 線像で心拡大は目立たず、肺うっ血を肺炎像と見間違ふことがある。
  8. 断層心エコーで診断が可能であり、診断がつき次第、小児心臓外科手術が可能な専門施設へ紹介する。
  9. 死亡する症例や中枢神経系後遺症をきたす症例が存在し、生来健康な乳児に発症する急性循環器疾患として看過できないものである。
- 

文献 5)より改変引用

図 2 : 乳児特発性僧帽弁腱索断裂 (生後 1 ヶ月) の胸部 X 線像、断層心エコー所見ならびに手術所見 (文献 3) 5) より引用)





2014年2月28日放送

## 乳児特発性僧帽弁腱索断裂 知っておきたい急性心不全の原因疾患

国立循環器病研究センター 小児循環器部  
部長 白石 公

乳幼児特発性僧帽弁腱索断裂とは、生来健康である乳児が数日の感冒様症状に引き続き、突然の重度の僧帽弁閉鎖不全により急速に呼吸循環不全に陥る疾患のことをさします。

本疾患は原因が不明で、過去の報告例のほとんどが日本人乳児であるという特徴をもちます。発症早期に的確に診断され、専門施設で適切な外科治療がなされないと、急性左心不全により短期間に死に至ることもあり、また外科手術により救命し得た場合も、人工弁置換術を余儀なくされたり、神経学的後遺症を残すなど、子どもたちの生涯にわたる重篤な続発症をきたすことがあります。しかしながら、本疾患は国内外の小児科の教科書に独立した疾患として記載されておらず、患者さん家族のみならず、多くの一般小児科医も本疾患の存在を認識していないのが特徴です。また本疾患は急激に発症するために胸部レントゲン写真で心拡大が明らかでないことが多く、急性左心不全による肺うっ血像を肺炎像と見間違ふことも希ではありません。本疾患には数多くの臨床的特徴がみられます。その情報を広く全国の小児科医が認識することで、早期診断と早期治療が可能となり、死亡例や重篤な合併症を減らすことができると考えられます。

本日は、本疾患の特徴について簡潔にお話したいと思います。

### 病因と病態生理

突然に僧帽弁腱索が断裂する原因としては、ウイルス感染による弁および腱索の炎症、母体から移行した自己抗体特にシェーグレン症候群の母体に基因するSSA抗体が関与すると考えられています。その他、川崎病の回復期などに発症することがあり、これら何らかの感染症や免疫異常が引き金となる可能性が考えられていますが、病因の詳細は不明です。

### 臨床所見

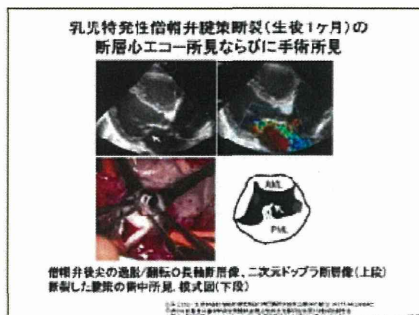
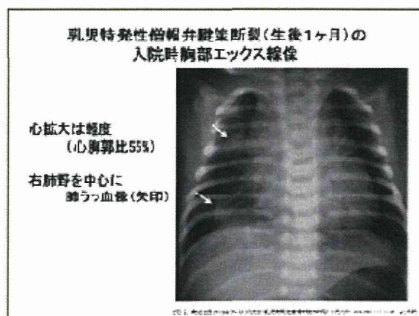
本疾患は生後4～6ヶ月の乳児に好発します。数日の発熱、咳嗽、嘔吐などの感冒様の前駆症状に引き続き、突然に僧帽弁腱索が断裂します。重度の僧帽弁閉鎖不全により心拍出量の低下と著しい肺うっ血をきたし、短時間に多呼吸、陥没呼吸、呼吸困難、顔面蒼白、頻脈、そしてショック状態に陥ります。早期発見と早期の外科治療がなされないと、急性心不全に基づく多臓器不全により死亡したり、救命し得ても重度な中枢神経系障害を残すことがあります。また広範囲に複数の腱索が断裂すると、人工弁置換を余儀なくされる場合があります。乳児時期に人工弁置換を行った場合は、生涯にわたる抗凝固剤の内服と再弁置換もしくは再々弁置換術が必要となることがあります。女兒では成人期に妊娠や出産に際して大きな障害となります。

通常、胸骨左縁第IV肋間から心尖部にかけて収縮期逆流性心雑音が聴取されます。これまでに心雑音が指摘されてことのない乳児が急速に呼吸循環不全に陥り、同部分で明らかな心雑音が聴取された場合には、本疾患を疑う必要があります。ただし急性左心不全による肺水腫のため、肺野に全体に湿性ラ音が聴取され、心雑音が聴き取りにくい場合があるので注意が必要です。

## 検査所見の特徴

急性循環不全によるショックから白血球数は中等度の増加がみられますが、一般に CRP 値は軽度の上昇に留まることが多いです。心不全の強い症例ではトランスアミナーゼ値が上昇しますが、一般に心筋逸脱酵素、とくに CPK-MB や心筋トロポニン T の上昇は見られません。

急速に症状が進行する多くの症例では、胸部 X 線写真における心拡大は比較的軽度です。心胸郭比として 55%～60%までと考えられます。そして、両肺野にうっ血像が認められます。心電図では特徴的な所見は少なく、左室への急速な容量負荷による左胸部誘導で T 波の平坦化や陰転が見られます。確定診断は断層心エコーで行います。左室長軸断面において、僧帽弁尖の高度な逸脱および翻転、腱索の断裂、ドプラー断層で大量の僧帽弁逆流シグナルを確認します。



## 病理検査所見

僧帽弁置換が行われた症例では、弁および腱索組織の病理所見が明らかになっています。肉眼所見では、僧帽弁は一部でゼラチン様の粘液様変性により肥厚した部分が認められます。一方で断裂した腱索は白色で萎縮した所見が認められることが多いとされています。組織所見では、マクロファージや T リンパ球を主体とした単核球の浸潤が認められますが、その程度は軽度です。細菌性心内膜炎を疑わせるような多核白血球を主体とした高度な炎症性細胞浸潤は認められません。これらの所見からもウイルス感染が一因をなしていることが示唆されています。

## 鑑別診断

基礎疾患のない 4～6 ヶ月の乳児に、数日の感冒要症状に引き続き、突然の多呼吸、陥没呼吸、顔面蒼白、ショック症状がみられ、聴診上で収縮期の逆流性心雑音が聴取された場合、本疾患を疑います。一般に心エコーにより比較的容易に診断がつかますので、診断がつき次第、可及的に乳児の僧帽弁形成または僧帽弁置換術が行える小児病院もしくは専門施設に紹介します。

急速な左心不全のために心拡大が顕著でないことが多く、心疾患として認識されないことがあります。また上気道炎症のあとに左心不全による肺うっ血をきたすため、肺炎と初期診断する可能性があるため注意が必要です。

## 治療

診断がつけばまず呼吸循環動態の改善に努める必要があります。呼吸困難が強く血液ガス所見でアシドーシスや乳酸値の上昇が見られる場合は、挿管人工呼吸管理、アシドーシスの補正、強心薬の持続静脈投与、動脈ラインおよび中心静脈ラインの確保による集中治療管理を行います。これらの管理によっても循環動態が維持できない場合には、もしくは入院時より大量の僧帽弁閉鎖不全により重度のショック状態および挿管人工呼吸管理にても対応が困難な呼吸不全で搬送された症例では、時期を逃さずに外科手術に踏み切ります。

手術は一般に人工腱索を用いた僧帽弁腱索形成術を行います。僧帽弁輪が拡大した症例では弁輪縫縮術も併用します。ただし複数の腱索が断裂した症例や、断裂が前尖と後尖の広範囲にわたり人工腱索では修復が不可能と判断される場合は、人工弁置換術を行います。好発年齢である生後4～6ヶ月の乳児では、通常経16mmの機械弁を挿入します。

## 全国調査

平成22年に私たちが行った全国調査の結果では、過去16年間に88例の発症があり、死亡例が6例(6.8%)、人工弁置換症例が25例(28%)報告されており、生来健康な乳児に発症する急性疾患として見逃すことのできない疾患です。原因としては前述しましたように、ウイルス感染、川崎病、母体由来の抗SSA抗体などが考えられていますが、詳細は不明です。早急な検討が必要と考えられます。私たちは平成25年度の厚生労働科学研究により、病院と治療法に関する全国的な前向き研究を実施しています。外科的治療として人工腱索による弁下組織の修復が功を奏すると心不全症状が軽快し比較的予後良好ですが、人工弁置換例では生涯ワーファリンの内服や再弁置換、再々弁置換術が必要になり、長期的な経過観察と治療が必要となります。

## まとめ

乳児特発性僧帽弁腱索断裂は、生来健康な生後4～6ヶ月の乳児に好発し、数日の感冒様症状に引き続いて突然の呼吸循環不全で発症する疾患です。本疾患の初期には心拡大は目立たず、肺うっ血像を肺炎像と見間違ふことがあるので注意が必要です。断層心エコーで診断が可能であり、診断がつき次第、乳児の心臓外科手術が可能な小児循環器専門施設に紹介する必要があります。適切な診断と外科治療が実施されると救命は可能ですが、死亡例や人工弁置換例も多数存在し、生来健全な乳児に発症する急性疾患として看過できない疾患であると考えられます。本疾患は小児科の教科書に独立した疾患として記載されておらず、多くの小児科医が本疾患の存在を認識していないのも問題です。臨床的特徴を広く全国の小児科医が認識することで、死亡例や重篤な合併症を起こさないよう努力する必要があります。

# 赤ちゃん 突然心不全

## 血液逆流 風邪似の症状から急速悪化

### 心臓弁難病 死亡率 8.4%

厚生省調査

心臓の弁に異常が起き、元気が赤ちゃんが急に心不全を起す、まれな難病「乳児特発性僧帽弁閉鎖不全症」の死亡率は8.4%であることが、厚生労働省の調査による初の全国調査で分かった。発熱など風邪のような症状から急速に悪化するのが特徴で、小児がかかる他の心臓病よりも死亡率は高いという。23日の米医学誌「サイキアトリック」(電子版)に掲載される。

心臓の左心房と左心室の間には、扉状に開く「僧帽弁」があり、リズムよく開閉して血液の逆流を防ぐ。ところがこの病気で僧帽弁を引っ張る数十本の糸状の「腱索」の一部が切れて、弁の動きが不安定になって血液が逆流。全身に血液を送る機能が低下する。原因は不明だが、感染症などが引き金になる可能性があるという。

研究班の調べでは、1995～2013年の間に全国で95人の発症が確認された。大半は生後4～6か月の乳児で、8人が死亡、10人に脳障害などの後遺症が残った。

早期の手術で腫瘍を修復

一歩の心臓集車の運転手(18・0110)。

もあまり知られていないため、治療が遅れる恐れがあるという。

研究班長の白石公・国立循環器病研究センター小児循環器・周産期部門長は「元気があった赤ちゃんの呼吸が荒くなったり、顔面が真っ青になったりしたらこの病気を疑い、受診してほしい」と話す。

## 胃がん8割ピロリ菌原因

WHO 報告書

胃がんの発症につながるピロリ菌(ヘリコバクター・ピロリ)の慢性感染が原因とする報告書をまとめた。除菌で胃がん発生の危険性が30～40%減る可能性があることが、各国がピロリ菌を考慮した胃がん対策をこころみつつある。

報告書では、ピロリ菌は全胃がんの78%、特に日本人に多い、噴門部(胃と食道のつなぎ目の部分)以外の胃がんでは89%がピロリ菌の専門組織である国際がん研究機関の作業部会が、全世界の胃がんの約8割はピロリ菌の慢性感染が原因とする報告書をまとめた。除菌で胃がん発生の危険性が30～40%減る可能性があることが、各国がピロリ菌を考慮した胃がん対策をこころみつつある。



報告書では、ピロリ菌は全胃がんの78%、特に日本人に多い、噴門部(胃と食道のつなぎ目の部分)以外の胃がんでは89%がピロリ菌の専門組織である国際がん研究機関の作業部会が、全世界の胃がんの約8割はピロリ菌の慢性感染が原因とする報告書をまとめた。除菌で胃がん発生の危険性が30～40%減る可能性があることが、各国がピロリ菌を考慮した胃がん対策をこころみつつある。

「各国が患者数や医療優先度、経済効果の分析をした上で、ピロリ菌の検査と治療戦略を構築することを勧める」と結論づけた。

胃がんは日本人が最も多くかかるが、死亡者数も肺がんに次ぎる位。

## 夢二学舎



生誕130年機に設立

同館の記念企画に携わった岡部昌幸・帝京大教授(近代美術史)が提案した。岡部教授によると、夢二の出身地・岡山の美術館

術館提供の出身地・岡山県にある夢二郷土美術館(岡山市)などは22日、「竹久夢二学舎」を設立すると発表した。中央画壇から離れ、大衆作家だった夢二に関する研究は少なく、研究者を増やすのが狙い。27日に東京で創立大会を開く。

## 火星探査機 周回軌道に

NASA 大気分析へ

【ニューヨーク＝中島暉雄】米航空宇宙局(NASA)は21日、昨年11月に来日した火星探査機「 MAVEN」が無人大気探査機「 MAVEN」(全長11.5メートル)が、火星の周回軌道に入ったと発表しました。今後、高度約150キロから6000キロの楕円軌道を周回しながら、約1年間にわたって火星の大気成分などを詳しく分析する。2030年代を目標とする火



## Rupture of mitral chordae tendineae in infants more common than thought

Fri, 08/08/14 - 12:30

By David Douglas

NEW YORK (Reuters Health) - In young children, rupture of the mitral chordae tendineae is more common than previously thought, according to a survey by Japanese researchers.

"Acute rupture of the mitral chordae tendineae in infants is a new syndrome and should be recognized as a significant cardiovascular disorder that may cause sudden onset of cardiogenic shock and death," Dr. Isao Shiraishi of the National Cerebral and Cardiovascular Center in Osaka told Reuters Health by email.

In a paper online July 25 in *Circulation*, Dr. Shiraishi and colleagues note that there have been several recent reports of such rupture in children in Japan; most of them were in infants, and congenital malformations of the mitral valve apparatus were absent.

However, "pediatricians, and even pediatric cardiologists, do not know much about the disease," the team says.

To gain further information, they sent questionnaires to clinical training hospitals approved by the Japanese Society of Pediatrics requesting information on such cases in children under the age of 15 years.

Ultimately 95 cases diagnosed from 1995 to 2013 were identified; 81 of the children were between four and six months old. The underlying conditions before rupture included Kawasaki disease (in 10 cases), maternally derived anti-SSA antibodies (in two cases) and endocarditis (in one case).

Surgery was performed on 80 patients. This involved mitral chordae plasty in 52 cases and mechanical valve replacement in 26. Six patients died before being operated on and two did so shortly afterwards. In ten patients there were significant persistent neurological complications.

Histopathological examinations of 28 of the mitral valves and chordae revealed inflammatory reactions with predominant mononuclear cell infiltration in 18 cases and increased fibrous and myxoid tissue in 11 cases.

These findings suggest that "non-bacterial infectious or autoimmune endocarditis and myxoid changes are involved," the team writes.

Although the condition appears to be predominantly Japanese, they note, cases may have occurred in other countries as well. Because the disease is not currently recognized worldwide, some patients may have remained undiagnosed or been misdiagnosed.

The precise etiology is uncertain, but the researchers conclude that "acute rupture of the mitral chordae tendineae should be recognized as a significant cardiovascular disorder that may cause sudden onset of cardiogenic shock or death in infants all over the world."

SOURCE: <http://bit.ly/1AXNK5E>

*Circulation* 2014.

(c) Copyright Thomson Reuters 2014. Click For Restrictions - <http://about.reuters.com/fulllegal.asp>



